



紙の宝物

原田マハ

四年ほどまえに、パリに拠点をもった。「楽園のカンヴァス」以降、この街を舞台にした小説を連続して執筆するようになり、取材のために頻繁に行き来するようになつて、いつそ拠点をもてばもっと仕事が進むだろうと思ひ、アパートを借りたのだ。

パリに暮らして実にいいと思うことはさまざまだが、その最たるものが街歩きを楽しむことだ。あちこちに美術館やギャラリーがある。アートスポットだらけである。好きなアーティストの展示会の広告をメトロでみつけ、行ってみようと買った十五分後にはもう美術館に到着している。帰りには付近の古書店に立ち寄り、古いカタログや絵入りの雑誌を買って、カフェテラスのテーブルで広げて眺める。この時間が実にいい。

私は、パリのアートスポットに美術館やギャラリーばかりでなく、美しい古書店を数えている。古くから営まれている本屋もいくつかあり、店自体が文化遺産といつてもいいような場所もある。

パリの中心部を流れるセーヌ河畔には、古本の屋台がずらりと並んでいるエリアがある。この古本屋は「ブキニスト」(本を扱う人)と呼ばれて、ずっと昔からパリっ子たちに親しまれてきた。なんでも、十六世紀にはすでに存在していたようである。

石の手すりにながしりと設置されている緑色のペンキが塗られた大きな木箱。南京錠のついたふたを開け、ばたばたと展開していくと、古本屋の様変わりする。古雑誌、ポスターやポストカードも扱っていて、ひとつひとつのブキニストに個性がある。アート中心の店、映画のパネルフレットを扱う店、猫の絵本をたくさん売っている店。店主はかたわらのディスプレイクターズチェアにのんびりと陣取って新聞を読む。交渉次第で少し負けてくれることも。ノーベル文学賞受賞者、かのアナトール・フランスも、ブキニスト巡りの楽しさを書き残している。

私が特に気に入っている古書店は、パリでいちばん古いパッサージュ(アーケード商店街)、ギャルリ・ヴィヴィエンヌ内にある「ジュソーム書店」だ。ギャルリ・ヴィヴィエンヌは一八二三年に竣



はらだ・まは ●作家。東京都生まれ。関西学院大学文学部、早稲田大学第二文学部卒業。2006年「カフェを待ちわびて」で作家デビュー。12年「楽園のカンヴァス」で山本周五郎賞受賞、17年「リーチ先生」で新田次郎文学賞を受賞。他の著作に「本日は、お日柄もよく」「ジヴェルニーの食卓」「暗幕のゲルニカ」「サロメ」「たゆたえども沈まず」「常設展示室」「美しき愚かものたちのタブロー」など。

工したのだが、同店はその三年後オープンして以来、今日まで営業を続けている。古くは十七世紀の書物から、ごく最近の美術展カタログまで、取り扱いは幅広い。開店当時のままの店舗で、本棚に整然と並び赤茶けた背表紙を眺めていると、タイムスリップした気分になる。世界でいちばん美しい書店だと、私は思っている。店主のフランソワは四代目で大の日本びいきだ。頻繁に通ううちに会話を交わすようになり、いまではよき友人である。昨年、拙著「楽園のカンヴァス」のフランス語版が発売されたときは、我が事のように喜んでくれ、さっそく大量に注文してくれた。「古書じゃないけどいいの？」と訊くと、「関係ないさ、君の本なら」と。せんだって訪ねると、私の本が川端康成と大江健三郎のあいだに挟まれてウィンドウに飾ってあった。なんと面映く、うれしかった。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

紙づくりは、「森想い」なんです。

まず植えて→育てて→伐ったら→また植える。植林で森をうまく循環させながら、紙をつくっているんだって。これらの森のほとんどは、もともと使われていない牧草地や荒地だった場所。製紙会社は、自然の森に迷惑をかけないように、森をつくりながら紙をつくっているんです。

〈8年で成木となる樹種の植林例〉

8年目の植林区域

1年目 2年目 3年目 4年目 5年目 6年目 7年目 8年目

土地を分けて1年ごとに植林。8年サイクルで収穫・植林をしています。

紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。 <http://kamitsubu.com/>